

地形の捉え方に関する研究～岬・鼻・崎の地形を通じて～

徳島大学 学生会員 ○田中優也  
徳島大学大学院 正会員 真田純子

1. はじめに

地形に地名を与えるのは、人間がそこに何らかのまとまりを持った空間の認識をしているからである。そして、地形に付けられた地名が異なるということは、それぞれの地形がそれぞれで別の意味の空間を持っていると思われる。

本研究では、地形が類似しているものの地名は異なる「岬・鼻・崎」という地形地名を取り上げる。そして、これらの3つの地形が、空間の捉え方によりそれぞれ区別されていると仮定すると、その地名を付けて区別する際の人の地形の捉え方、つまり、人間の空間認識を知ることができるのではないかと考える。

本研究では、岬・鼻・崎という3つの地形を分析の対象とし、それらを比較することによって、岬・鼻・崎の3つの地形に対する人間の空間認識の違いと、その物理的要因を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

まず、研究対象となる岬・鼻・崎の性質を理解するために文献調査を行い、分布の傾向を把握するために分布調査を行う。この2つの調査から岬・鼻・崎の基本的な情報を把握する。

次に、物理的観点からの調査として、断面調査を行う。この調査から、岬・鼻・崎の形態的な捉え方を把握していく。また、人文的観点からの調査として、ヒアリング調査を行う。この調査から、人が地形のどの領域を岬・鼻・崎として捉えているのか、そして、岬・鼻・崎についての情報を把握していく。そして、これらの調査結果から、岬・鼻・崎をどのように捉えているかを把握する。

3. 研究結果

3.1 文献調査 「岬は山の海中に突出たもの」、「鼻はわずかの例外を除くと山の突出たところ」、「崎は陸地の海中に突出たもの」という説から、岬・鼻・崎はそれぞれ地形的な要因で区別されていることが分かった。また、「岬、鼻、崎の数の多少は、海岸線の発達や人口密度よりも、岬、鼻、崎の利用性に関わりを持ち、したがって漁業や海上交通の盛んな歴史の古い地方に大である」、「漁業従事者や沿岸航海者が海上で自己の位置を知るために行われた視認法に、岬・山などの陸の地形が用いられた」という説からは、岬・鼻・崎は漁村などの漁業が盛んだったとされる地域との関係性が強いということが分かった。「岬角の地名を注意して見ると、湾の外側や大きく突出した半島の尖端は多く“岬”の語尾が用いられ、“鼻”は湾の奥に分布する事が多く、“崎”はその中間位置に多く見られるという事実遭遇する」という説もあったが、湾は陸に入り組んだ構造をしており、どこを湾としてよいのか分からなかったが、大雑把に湾を定義し岬・鼻・崎の分布を見てみると、この説は正しいとは言い切れないことが分かった。

3.2 分布調査 国土地理院発行の2万5千分の1地形図から、全国の海岸線に存在する岬・鼻・崎の分布数と、海岸線の長さに対する分布数を把握した。岬・鼻・崎の分布は中国・四国・九州地方に多く、このことから、西日本にその分布が多いことが分かった(図1)。海岸線の長さに対する岬・鼻・崎の分布数の割合からは、崎の地形の割合が東北地方に高いということ、ほとんどの地方では崎の地形の割合が一番高いのに対し、中国・四国地方は鼻の割合が一番高いことが分かった。また、分布数が四国に多いことと、漁業や海上交通の盛んな瀬戸内

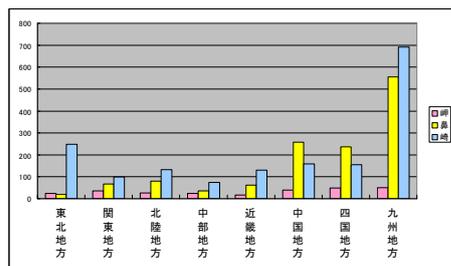


図1. 全国の岬・鼻・崎の分布数

海にその分布が多いことから、範囲を四国地方に絞り分布場所を地図上にプロットすると、岬の地形は太平洋側に多く、鼻の地形は瀬戸内海側に多いことが分かった。さらに、地名には海上の利用が関係している可能性があることが分かった。

**3.3 断面調査** 地図ソフト「カシミール」を用いて、岬・鼻・崎の地形の断面図を作成し、その断面図の先端部（岬・鼻・崎の先端から約 50m～100mの範囲）に着目すると、図 2 のようなパターンが見られたので、そのパターン別に分析を行った結果、鼻と崎の地形は割合にあまり差がなく、形態の分布が似ているということが分かった。また、岬の地形は先端付近で傾斜が急になる形の割合が高く、鼻・崎の地形は先端へ一定の角度で向かっているような形の割合が高いためその割合に差が見られ、形態の分布が異なることが分かった。（図 3）このことから、形態的な点では、鼻と崎の地形は同様のものとして扱うことができ、岬は鼻・崎の地形とは異なるものであるということが分かった。

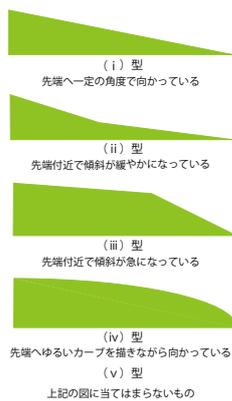


図 2. 岬・鼻・崎の先端部パターン

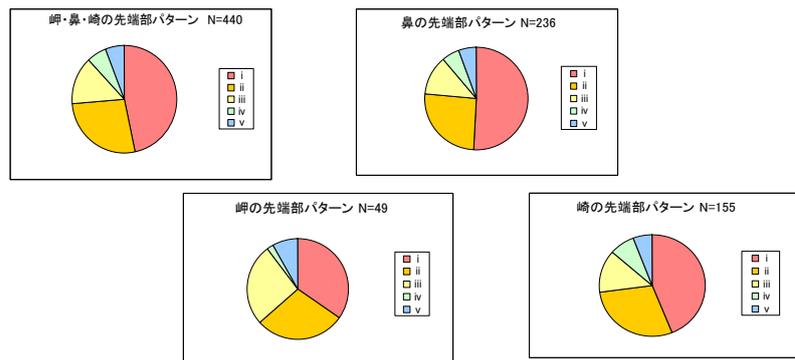


図 3. 岬・鼻・崎の先端部のパターンの割合

**3.4 ヒアリング調査** ヒアリング地域として、文献調査より「漁村など漁業が盛んだったとされる地域との関係性が強い」ということから、昔から存在している漁村にヒアリング調査を行った。この漁村の定義は、明治 35 年に徳島県で漁業権を得ることを目的に組織された漁業組合の存在していた地域とした。この調査の結果、漁村に住む人は先端を鼻・崎の地形と捉えているということが分かった。次に、ヒアリング地域を漁業組合に変更して調査を行った。ここでは、岬は規模が大きい領域として認識されていて、徳島県内に岬が 4 ヶ所もあるにもかかわらず、蒲生田岬しか岬と認識されていなかった。このことより、同じ縮尺の地形図で県内 4 つの岬を比べてみると、蒲生田岬が一番規模が大きく、このことより、岬として捉えられる地形は規模が大きな領域を持ったところだということが分かった。逆に、規模が小さい岬は地名上では岬と呼ばれていても、実際には岬と認識されていないことが分かった。このような結果から、鼻と崎の地形は同様のものとして捉えられており、また、岬の地形はそれらとは異なる規模の大きなものとして捉えられていることが分かった。

#### 4. 結論

物理的観点からの断面調査、人文的観点からのヒアリング調査の結果、岬・鼻・崎の 3 つの地形に対する人間の空間認識の違いとしては、鼻と崎では同様のものとみなされているが、岬はそれらとは異なる規模の大きいものと思われているということを示した。

また、岬・鼻・崎の 3 つの地形に対する人間の空間認識の違いの物理的要因としては、岬と鼻・崎では先端部の形態の傾向に違いがあるということを示した。

#### 【参考文献】

- 1) 鏡味完二：“日本地名学（上）科学篇” 1919
- 2) 篠原修：“景観用語事典 増補改訂版” 2007